春雪弓張月

前編

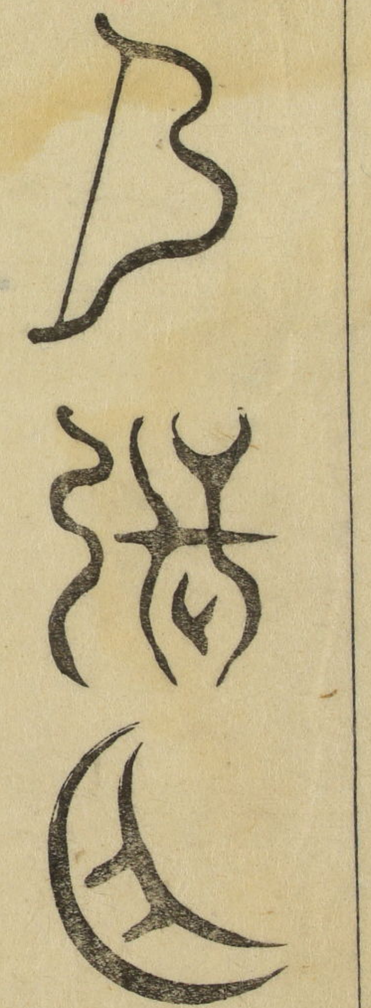
五

第九一号

へ13
3692
5

門へ13
號3692
巻5

曲亭翁原稿　西馬差人綴



東京書房　文昇堂熊谷梓

世ふ稗史ものゝ愛度のくハのゝ。そもゝ奈何といふに。相も變ぎ双業。ゝ年と暮ゝ。まゝ来る春の新玉ゝ。まゝ。ゝ千歳と祝月草双紙もとゝゝ。ゝ去年の閑鐫古販とゝ。ゝれハ。ゝ新案乃魁と早咲の梅のゝくと賞翫諸看官一陽来福の御慰ふ。朧月夜ゝ弓張ゝ。為朝傳記も既ふ九編の麦市とゝ。ゝ作者ゝ手柄ハ更ふ。ゝ故人の女者せらゝ。ゝと御伽噺に讀意中。色も香もふの屁糞方ゝれた。書賈ゝ。ゝ自業と不需前流人の知やゝる小説本と撰視用足紙らゝれど。卯月ふ勝手封疆れ化ゝ。ゝ平過梢林ゝ。並櫓の當ゝを的ゝて。四谷怪談裏表。将近節の櫻荘子。能吉刹ゝ。ゝ俱得せんと。猫拐子と人ゝ氣の夜叉とゝ。競ふのゝ軒後乃交代寝られぬまゝふ弓業ゝ。ゝ半面方題ふ斃反仗ふ投せ。ゝ。ゝ。ゝ立上ゝ。ゝ序文でゝざゝるもゝとゝゝ。ゝ。ゝ幾度爰まで歩運ゝ。ゝやゝるゝと口の中。ゝ。ゝ走帰りゝ。

嘉永六癸丑歳孟陽新鐫　樂亭西馬戯述

源八郎
鳥朝
東都名所
圖會内
山下秋暮
秋の山下
光明菴
朱寺
八町礫
紀平治太夫
鳥朝
妻
白縫姫
貞婦
鶴江鬘髮
鳥朝
正腹
一子
舜天丸

足利義康
養子
朝雅丸
海賊
渦丸
良臣
梁田
二郎
時員
藤江
恐

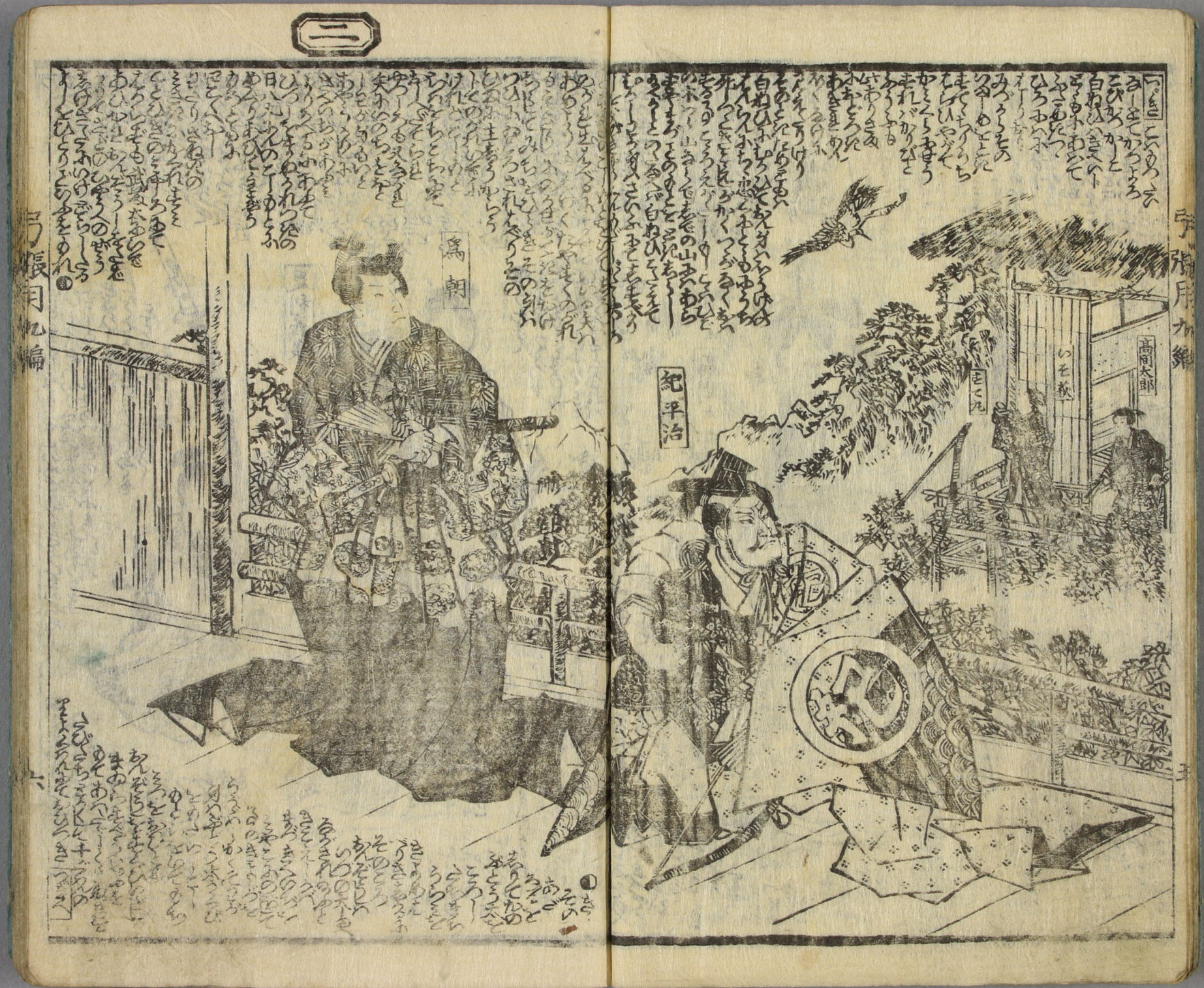
高間

白ぬひ

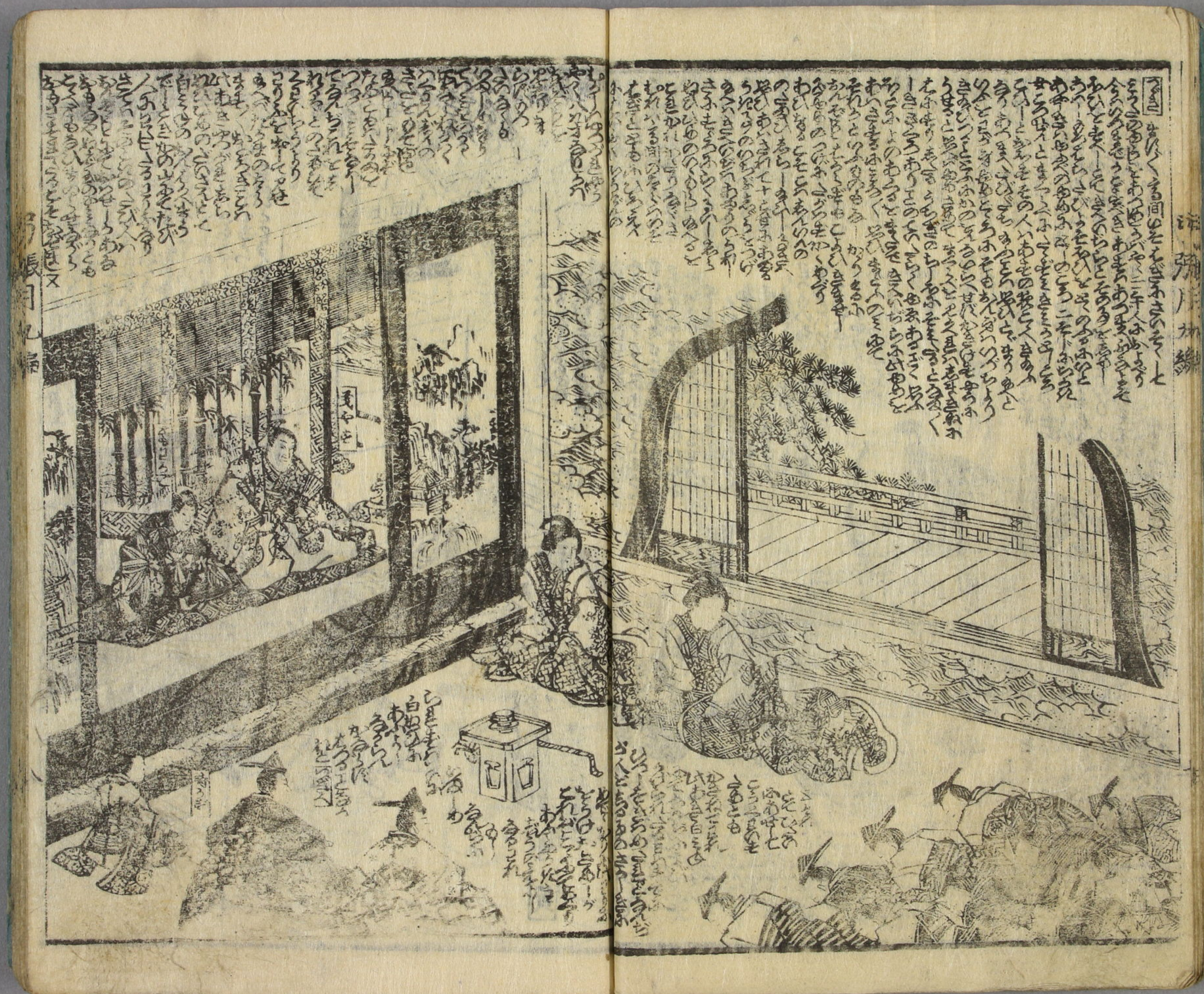
いを萩

高朝

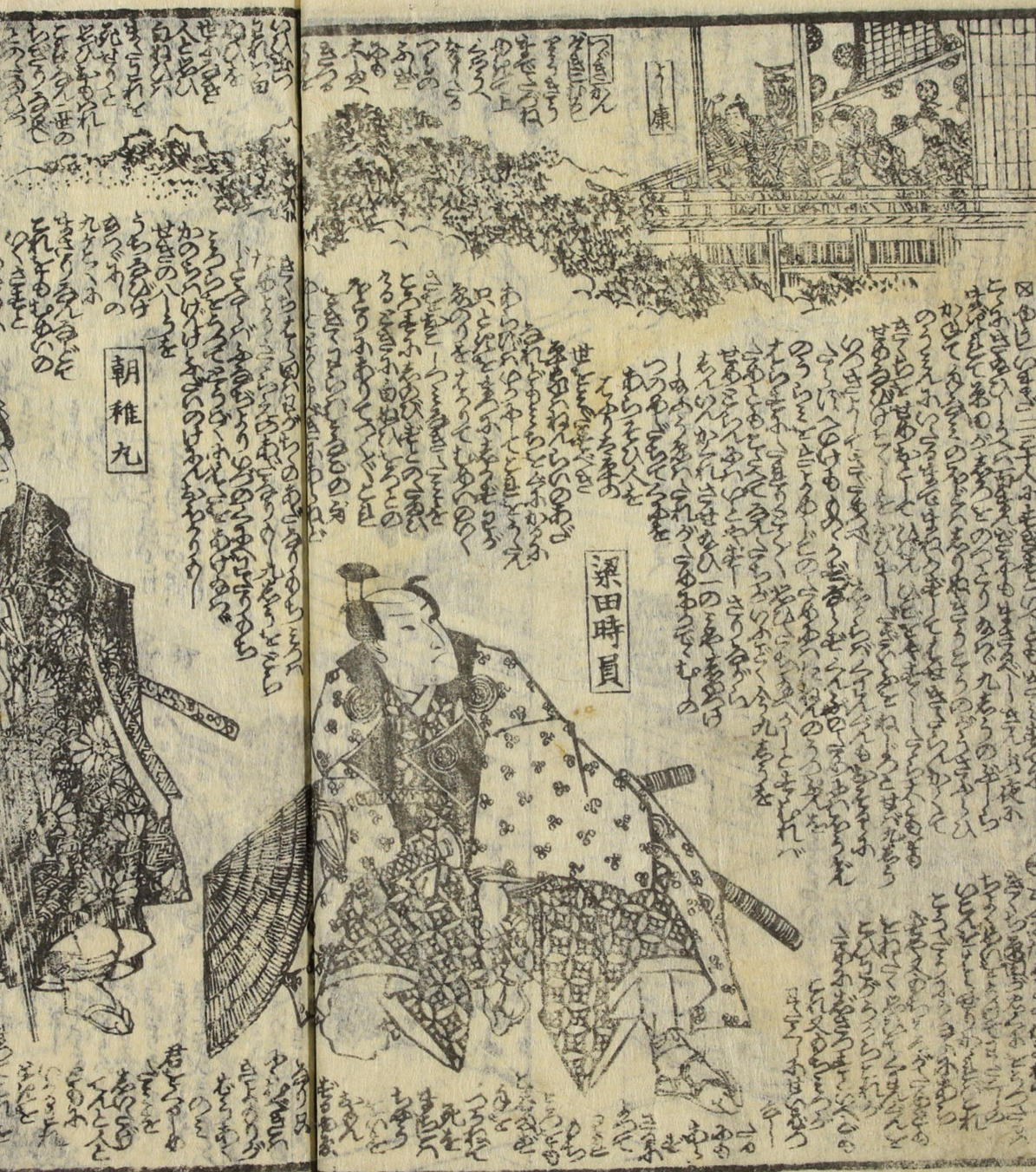
白にひ
義秋
高間太郎
若君


高間太郎
いそ萩
紀平治
為朝

足利義康
梁田時員
朝稚丸



朝雉丸
時員


康
梁田時員

朝稚丸

西馬縮譯國輝画圖
朝雅
時員
洞丸
朝雅
時員

時員

渦丸

朝雅

渦丸

渦丸
時員

朝雅

渦丸

朝雑

時見九郎
濁九首

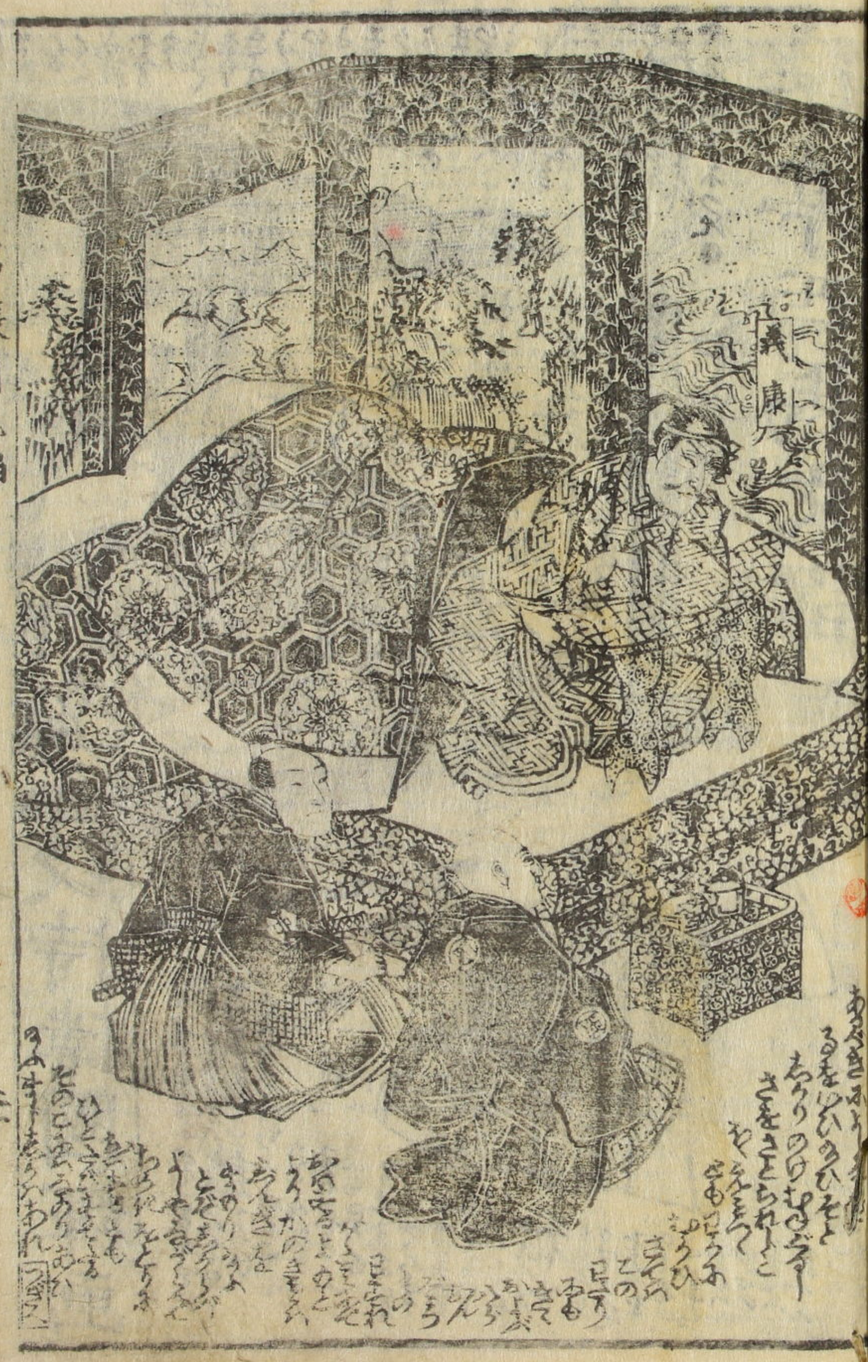
さくら
さくら
朝雉
白雞
年天九

紙平次
糸朝
白ぬり
朝雑

時員

朝雅

時員
朝雅


義康

妓持樓國輝画

樂亭西馬文譯

十編壹

佛説の因果應報儒家の汝を出て汝を帰る神道の六根精凈各其教喩(異)なれども道(理)筋同じ勧善懲悪なれば戯蒙話繪(図)も皆勧懲を旨とせり殊に故蓑笠翁が數部の著述に因果乃道理を微細記されし其中にも此弓張月に大人は妙案あれば書賈錦昇堂の需ふく文畧増画(図)ふく既に發兆せし幸に行われて今十編に至る巻中に琉球の模体に移りて次篇彼土風俗を圖画(図)猶集尾に爲朝親子は出るまでに千年流言の事なれば飾僞のなかれ画工格別出精(に)且彫摺寺念入製本仕候間不相變御求御笑覧奉希ひと版元の口演を半丁の埋草に書殘しこれ文催促師走中旬は夜業に妙なけ一方の責を防く愛如斯

嘉永六癸丑年春新鐫　樂亭西馬識

源八郎朝為
従曲四郎子

姑巴汎麻の
福禄
寿仙
高間の
太郎
妻磯萩

忠魂
幼君
守
護
源
舜天丸
八町礫の
紀平治太夫

朝雄様
足利義色

桑田時員

紀平治

辛天

白ぬひ

烏朝

高間太郎

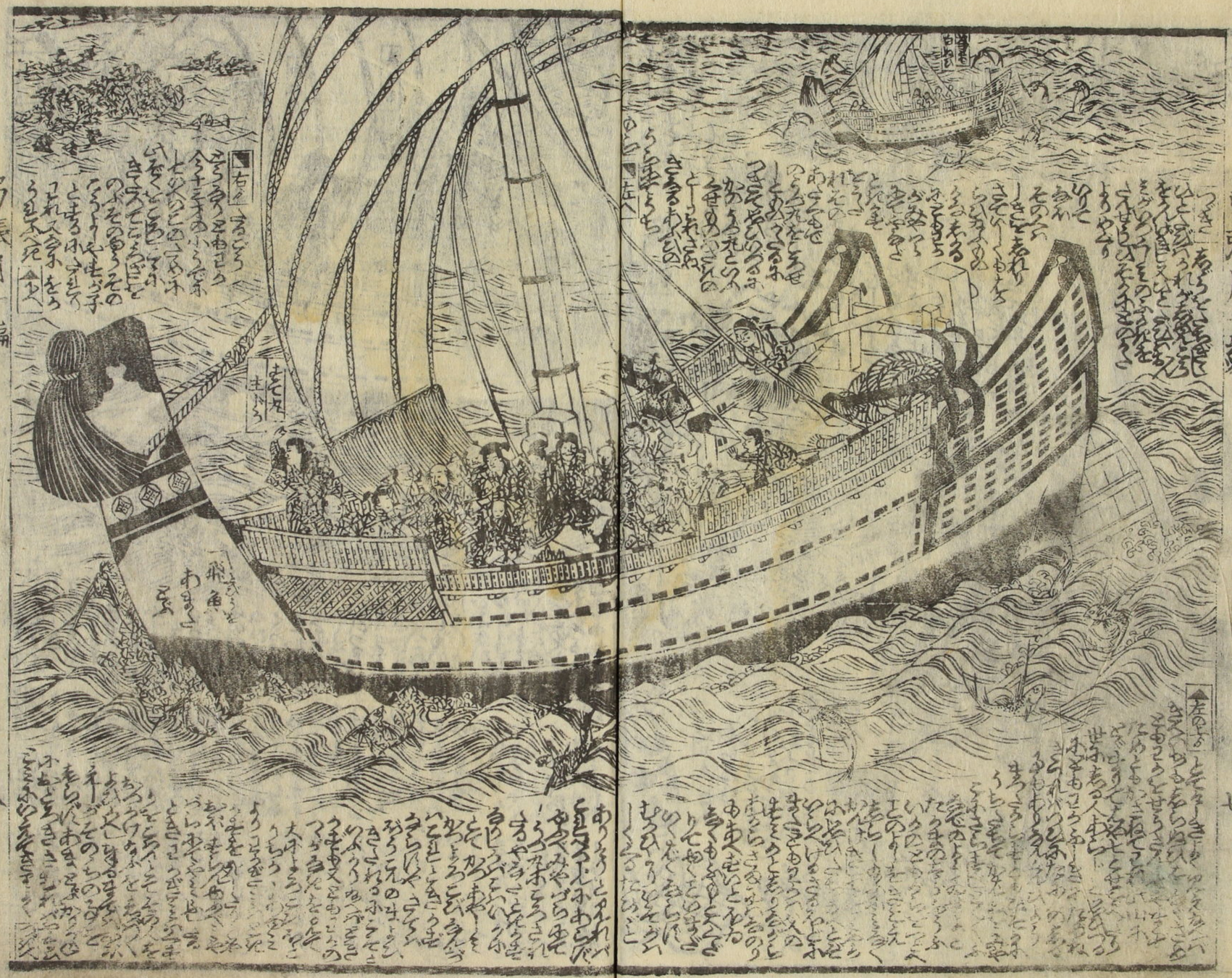
磯萩

紀平治

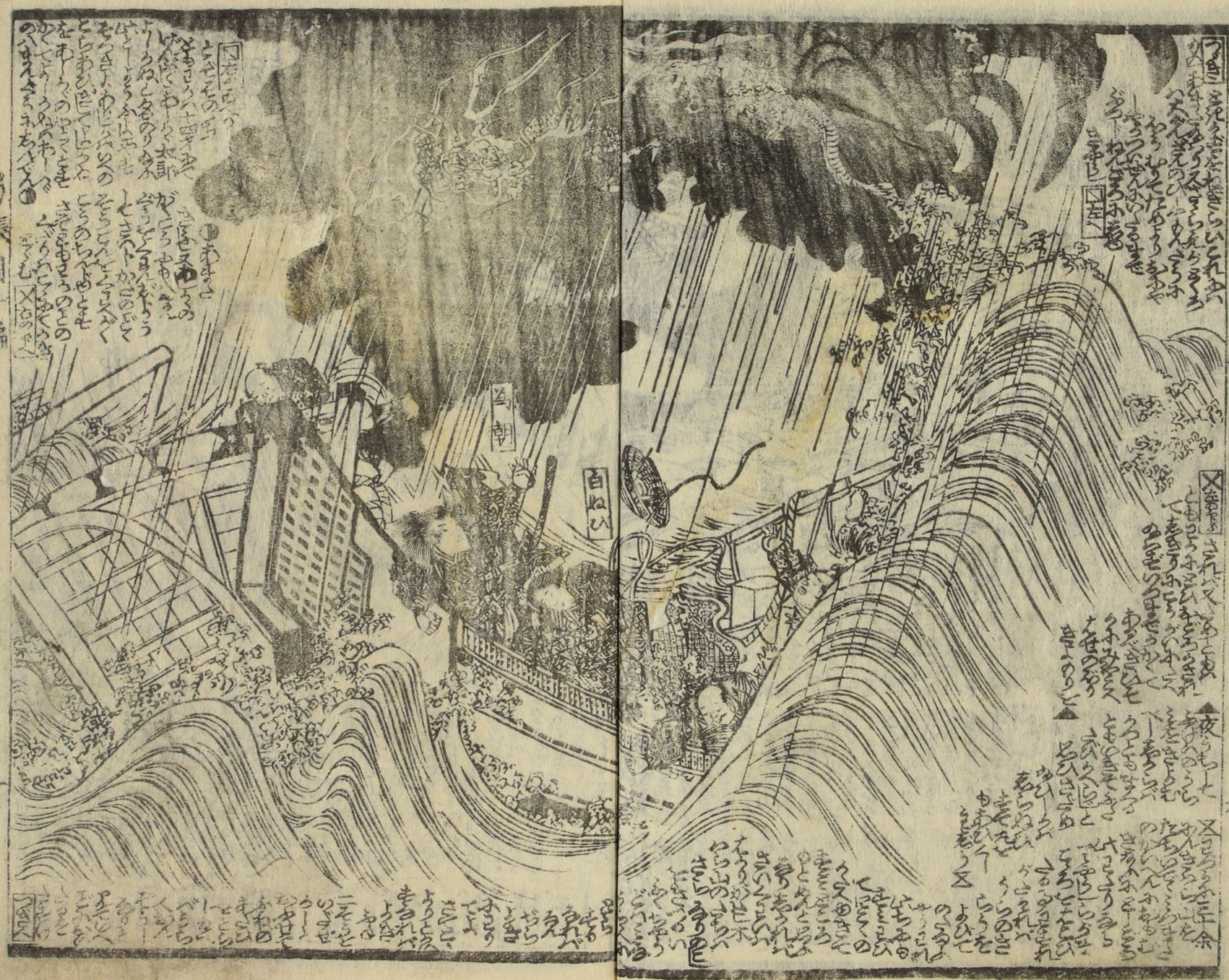
烏朝
高間太郎

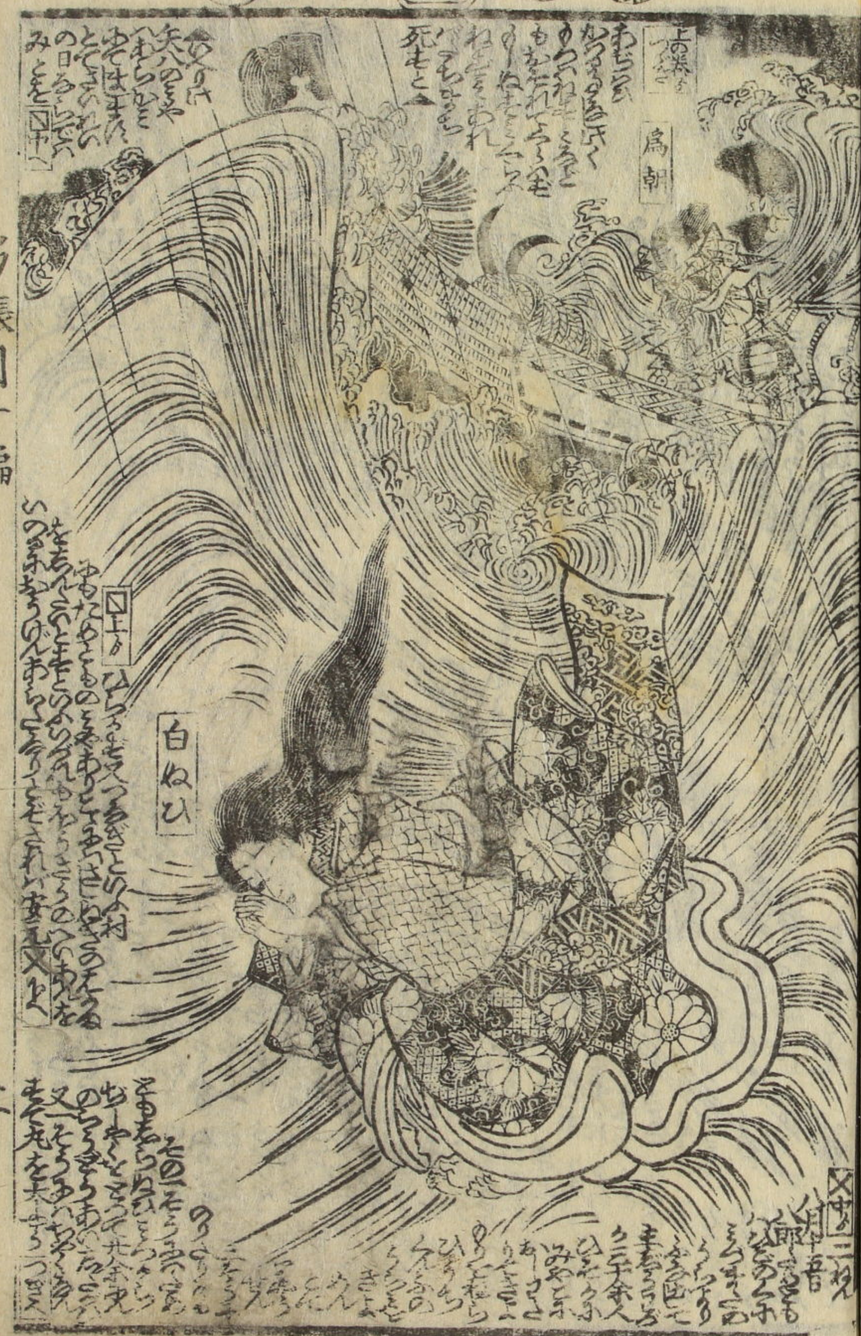
つゞき

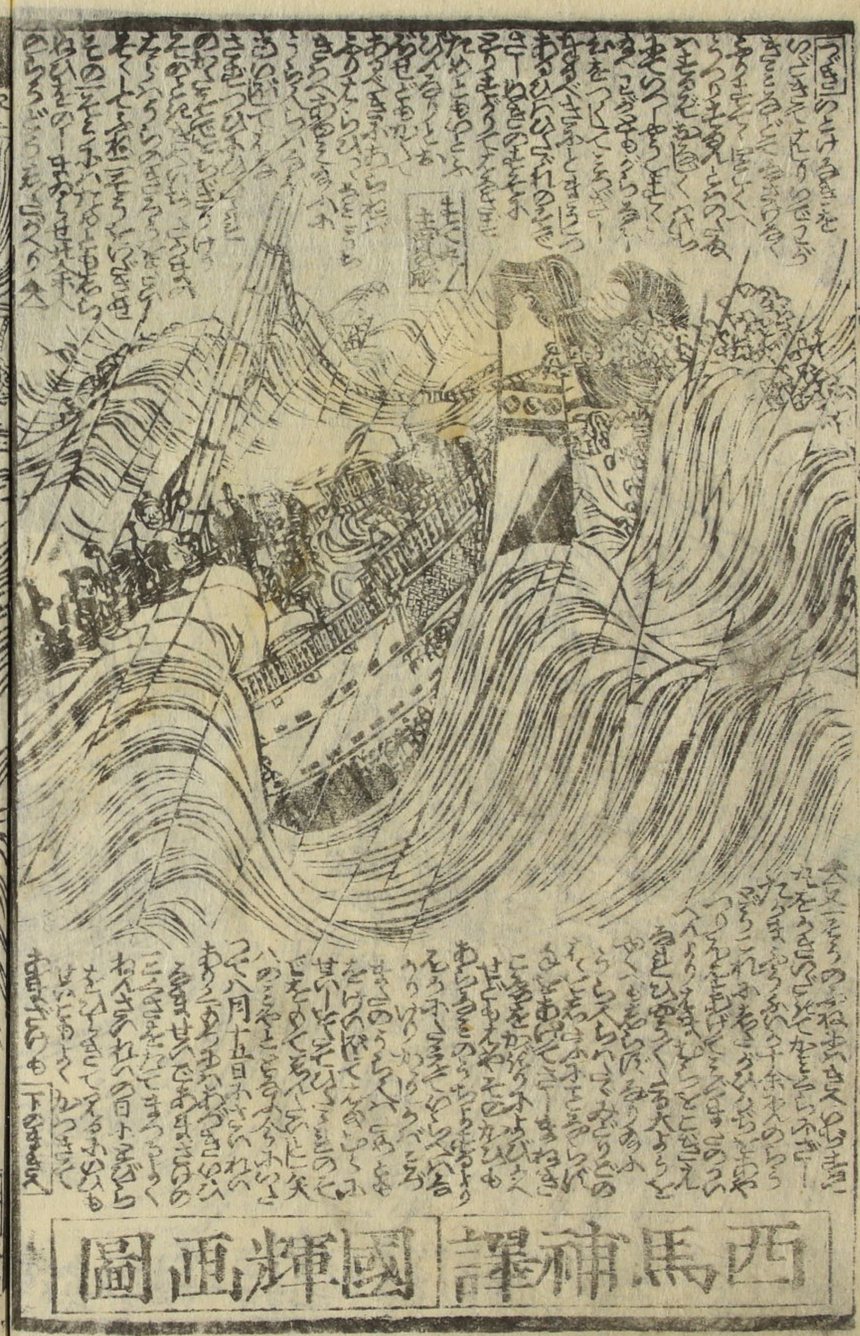
爲朝


飛魚

白ぬハ
水母

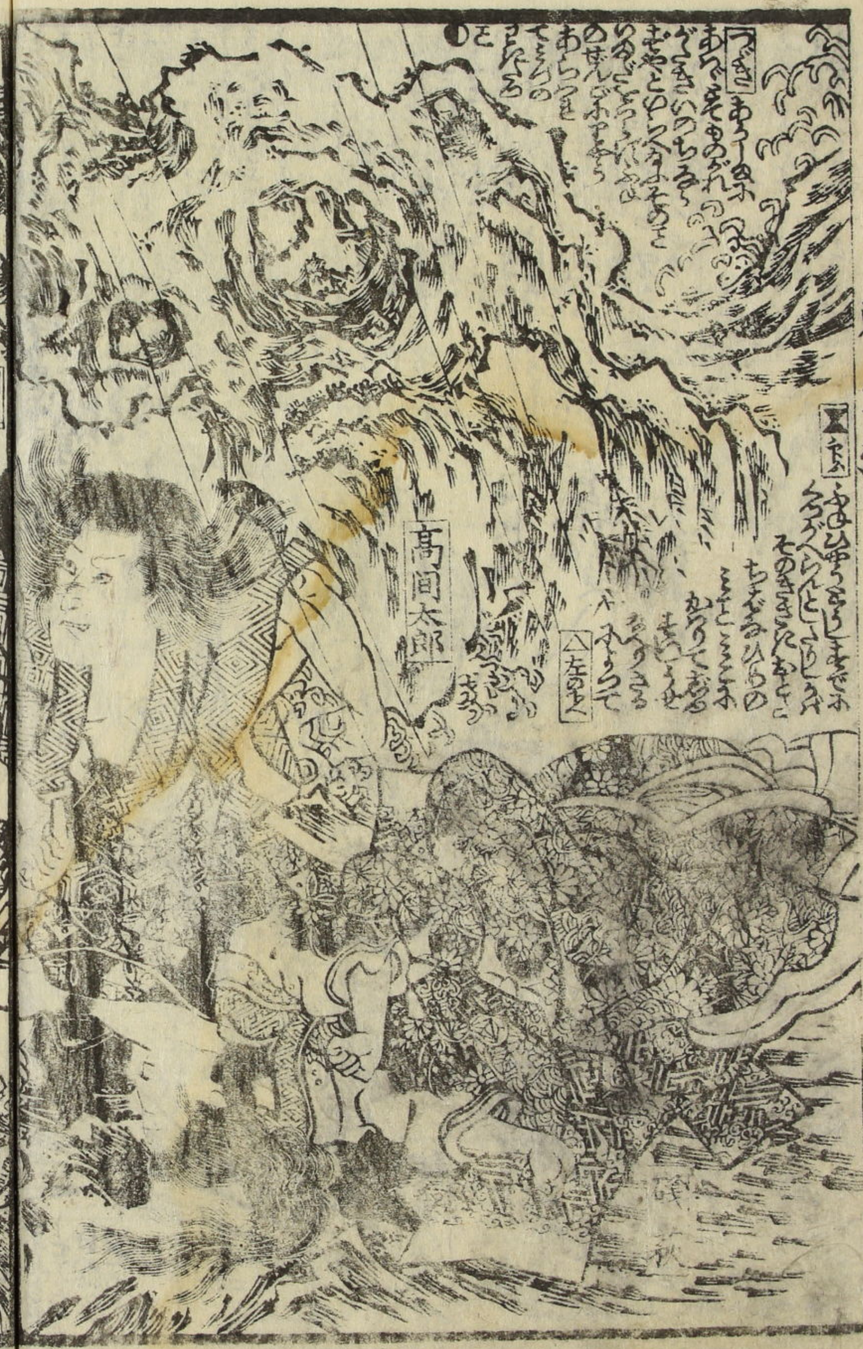






西馬補譯　國輝西圖

紀平治


高間太郎

南海の夷
紀平次

いと哀の夷

紀平治

舞天丸

紀平治

福禄寿仙

舞天九

紀平治

鞍王女
尚寧上
中婦君
毛國島

利勇

一雄齋國輝画